新見公立大学紀要　第37巻
一八七～二〇一頁、二〇一六年

論稿

岡山県新見市の金売吉次伝説

原田信之
（日本文学）

『義経記』などに登場する金売吉次は、源義経の運命を左右したとされる伝説的人物である。吉次に関係するという伝説を伝えている地は全国にあり、金売吉次伝説をめぐる問題は金属文化の面からも注目される。岡山県新見市（旧備中国）にも吉次に関する伝説が存在しており、古くは『古戦場備中府志』（一七三五年成立）に記述がある。吉次生誕地伝説のある新見市哲西町八鳥地区は源頼朝の御家人市川別当行房により築城されたという伝承がある西山城の城下町として栄えた地域で、吉次の産湯の井戸や道明寺屋敷と称される居住地の伝説がある。吉次終焉地伝説のある新見市足立田曽地区には吉次の墓と伝えられる金石さんと呼ばれる墓石があり、周辺には多数の「たたら製鉄」の跡がある。新見市に金売吉次伝説が伝えられてきた背景には、中国地方各地で盛んであった「たたら製鉄」や「炭焼」「鋳物師」の存在等が関係していると推定され、生誕地伝説から終焉地伝説までそろった金売吉次伝説の一事例として注目される。

（キーワード）金売吉次、新見市、道明寺屋敷、金石さん、たたら製鉄

はじめに

金売吉次は『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』『義経記』などに登場する金商人で、源義経（一一五九～一一八九）に大きな影響を与えたとされる伝説的人物である。

吉次が『義経記』に初めて登場するのは、巻一「吉次が奥州物語の事」である。牛若から改名して遮那王と称するようになっていた十六歳の時（後に元服して義経と改名）の記述に「その比三条に大福長者あり。名をば吉次宗高とぞ申しける。毎年奥州へ下る金商人なりける」という部分がある。[1] この記述によると、吉次宗高は京都の三条に住む長者で、毎年奥州に下る金商人だという。その後、金商人吉次は遮那王に奥州の事情を説明して取り入り、後に元服した義経を藤原秀衡に引き合わせて褒美をもらうことになる。

金商人として渡り歩いたとされるためか、全国各地に金売吉次に関する伝説がある。例えば、岩手県奥州市衣川区（旧衣川村）長者原廃寺の金商人吉次屋敷跡伝説、[2] 宮城県東松島市大曲（旧矢本町大曲）字五味倉の金売吉次居住伝説、[3] 宮城

県石巻市（旧河南町須江）関ノ入・長者館跡の金売吉次仮居住伝説、[4] 山形県山形市上宝沢（旧上宝沢村）の住吉神社は炭焼藤太の息子金売吉次が社殿を建立したという伝説、[5] 福島県会津若松市神指町高瀬（旧高瀬村）の観音堂は金売吉次・吉内・吉六のうち溺死した吉六の冥福を祈るため建立されたという伝説、[6] 熊本県熊本市北区（旧植木町）の吉次峠は金売吉次信高が強盗に殺されてその墓があることに由来するという伝説[7]など、枚挙にいとまがない。これら各地の伝説には、それぞれの事例ごとに金売吉次伝説が成立することになった背景があるとみてよいであろう。

岡山県新見市（旧備中国）にも金売吉次に関する伝説が存在している。新見市に伝承されている金売吉次に関する伝説はどのようなもので、それらの金売吉次伝説にはどのような意味があるのであろうか。本稿は岡山県新見市で採集した伝説についてまとめ、新見市の金売吉次伝説をめぐる諸問題について検討することを目的とする。

一　備中国の金売吉次伝説

備中国の金売吉次伝説に関するもので最も古いものは、享保二十年（一七三五）成立の平川金兵衛親忠『古戦場備中府志』巻之二哲田（多ヵ）郡六郷「西山城　八鳥村」項の末尾にある記述で、次のように記されている。

私云、源義経卿を奥州に具足し奉る売金の商吉次・末春は石田氏にて、当町の宿屋道明寺屋と号す。当郡井村に吉次が塚とて旧跡有。人皆しる所也。高野山東光院に守本尊十一面観音の像を寄進す。寄付証文にも、備中国哲田（多ヵ）郡八鳥町道明寺屋石田氏吉次・末春と書記し畢。[8]

この部分には、源義経を奥州へ連れて行った金売商吉次末春は石田氏で、（吉次の家は）町の宿屋道明寺屋と称されていること、（備中国）哲多郡井村（現在の岡山県新見市足立）に「吉次が塚」という旧跡があり皆が知っていること、（吉次が）高野山東光院に守り本尊の十一面観音像を寄付したこと、寄付証文にも「備中国哲田（多ヵ）郡八鳥町道明寺屋石田氏吉次・末春」と記されてあることが述べられている。なお、哲田郡は哲多郡の誤記である。

備中国の金売吉次伝説に関するもので次に古いものは、宝暦三年（一七五三）～七年（一七五七）成立の石井好胤『備中集成志』第三之巻神社之部「井村末吉宮」の項にある記述で、それには次のように記されている。

一、哲多郡井村ニ金売吉次末春之宮有。末春ハ当郡八鳥町道明寺屋石田氏、吉次末春トテ源義経公ヲ奥州へ奉二具足一金売也。高野山東光院へ吉次守本尊之十一面観音之像ヲ寄付証文于今有之也。[9]

この記述では、（備中国）哲多郡井村に「金売吉次末春之宮」があること、金売吉次末春は哲多郡八鳥町（現在の新見市哲西町八鳥「町」区）の道明寺屋石田氏であること、吉次末春は源義経を奥州へ連れて行った金売であること、高野山東光院に吉次が守り本尊の十一面観音像を寄付した証文が今でも有ることが述べられている。この『備中集成志』の記述は、二十余年先行する『古戦場備中府志』を参考にして作成されたものとみられる。両者の相違としては、『古戦場備中府志』には哲多郡井村に「吉次が塚」という旧跡があるという部分が、『備中集成志』では「金売吉次末春之宮」があると記されている点と、『古戦場備中府志』には吉次の家は町の「宿屋道明寺屋」とある部分が、『備中集成志』では「宿屋」が省略されて「道明寺屋」とだけ記されている点である。

次に古いものは、『備中集成志』が成立してから百二十六年後の明治十六年（一八八三）に作成された『備中国哲多郡八鳥村誌』「道明寺屋宅跡」の項にある記述で、それには次のように記されている。

本村字町場ニアリ、古時源義経ニ従ヒ奥州へ越シタル金売商石田吉次末春ノ居住セシ所ニシテ、其屋号ヲ道明寺屋ト称セシト云、而シテ石田氏居跡ヲ証明スヘシモノナシト雖トモ、或ル書ニ紀伊国高野山東光院ニ氏カ供シタル同院本尊十一面観世音ノ肖像寄付証文ニ、備中国哲多郡八鳥町道明寺屋石田吉次末春ト見ヘタリト古老ノ口碑ニ伝ヘ、今別ニ著シキ遺徴ナシ。[10]

この『備中国哲多郡八鳥村誌』の記述は『古戦場備中府志』を参考にして作成されたものとみられ、文中の「或ル書」とは『古戦場備中府志』のことと推定さ

れる。八鳥村内のことを調査したものであるため、井村の「吉次が塚」の記述が省略されている。

次に古いものは昭和四年（一九二九）に刊行された『阿哲郡誌』「道明寺屋敷」の項にある記述で、それには次のように記されている。

野馳村八鳥西山城趾の西麓、字町の中央に道明寺屋敷と称する処あり。備中府志に曰ふ。源義経の牛若丸と称したる頃、鞍馬を出でて奥州に逃れし時、之を伴ひたる金売商吉次末春の住せし所なりと。吉次は石田氏にして当町の富豪道明寺屋と号す。高野山東光院に守本尊十一面観音の像を寄進し、其寄付証文に備中国哲田郡八鳥町道明寺屋石田氏吉次末春と署名せりと。野馳校長故難波氏の高野山に照合せられしに、火災にかゝりて今や其物なしとのことなり。上市村井村の田曽といふ処に石田吉次の墓ありと伝ふるも確証を得ず。[11]

文中に「備中府志に曰ふ」とあることから、『阿哲郡誌』は『古戦場備中府志』を利用してこの部分を記述したことがわかる。『阿哲郡誌』で『古戦場備中府志』に記されていない情報は、最初の「野馳村八鳥西山城趾の西麓、字町の中央に道明寺屋敷と称する処あり」という部分と、最後の「野馳校長故難波氏の高野山に照合せられしに、火災にかゝりて今や其物なしとのことなり。上市村井村の田曽といふ処に石田吉次の墓ありと伝ふるも確証を得ず」という部分である。

最初の部分には、野馳村八鳥（現在の新見市哲西町八鳥）の西山城趾の西麓で、字町（現在の町区）の中央に「道明寺屋敷」と称される地があると記されており、『古戦場備中府志』より詳細な記述となっている。最後の部分には、野馳（尋常高等小学校）校長故難波氏が高野山に吉次の寄付証文について照合したところ、火災のため今はその寄付証文は残っていないとの返答があったことと、上市村井村田曽（現在の新見市足立田曽）に石田吉次の墓があると伝えられているが確証を得ないという二点の新たな説明が付されている。

これらの資料から、少なくとも十八世紀前半には備中国において金売吉次伝説が成立していたらしいことと、備中国には哲多郡八鳥（新見市哲西町八鳥）と哲多郡井村（新見市足立）の二ヶ所に金売吉次関連伝説が伝えられてきたことがわかる。

Ⅱ　八鳥の金売吉次産湯井戸

最初に、備中国哲多郡八鳥（現在の岡山県新見市哲西町八鳥）の金売吉次伝説について検討してみることにしたい。先に見た『古戦場備中府志』『備中集成志』『備中国哲多郡八鳥村誌』『阿哲郡誌』の情報をまとめると、吉次は源義経を奥州へ連れて行った金売商で、石田吉次末春といい、屋敷跡は西山城趾の西麓に位置する八鳥「町」区の中央にある「道明寺屋」で、『古戦場備中府志』が成立した享保二十年（一七三五）頃には道明寺屋は「宿屋」であったらしいこと、高野山東光院に吉次が守り本尊の十一面観音像を寄付した証文が有ると伝えられていたこと、吉次の寄付証文について野馳校長故難波氏が高野山に問い合わせたが火災のため今はその寄付証文は残っていないとの返答があったことなどがわかる。

昭和四年（一九二九）に刊行された『阿哲郡誌』「道明寺屋敷」の項に「野馳校長故難波氏の高野山に照合せられしに、火災にかゝりて今や其物なしとのことなり」とある記述について、新見市立野馳小学校で聞いてみたが、関連資料は残っていないとのことであった。しかし、野馳小学校調査時に閲覧した野馳小学校創立百周年史誌編集委員会編「野馳小教育のあゆみ」（昭和四十八年発行）に、野馳尋常高等小学校第三代校長難波柾苧氏が、明治四十二年から大正十一年まで校長職にあり、在職中に亡くなったことが記されていた。このことから、難波柾苧校長が吉次の寄付証文について高野山に問い合わせたのは明治四十二年から大正十一年までの間らしいことがわかった。故難波柾苧校長の長男難波栖記氏は元哲西町長であったが既に亡くなっておられるため、子孫の方々に聞いてみたが、高野山に問い合わせた件は聞いていないとのことであった。また、栖記氏が亡くなられた後に大量の書類を焼却したとのことなので、関連書類は存在しないようである。

現在、八鳥（はっとり）には町（まち）区と谷（たに）区の二地区がある。町区は戦国期の西山（にしやま）城下として形成されたと推定されており、西山城跡は標高約五百メートルの要害（ようがい）山上にある。西山城（要害山城ともいう）について、『古戦場備中府志』巻之二哲田（多ヵ）郡六郷「西山城　八鳥村」の項に「当城開基、布（市ヵ）川別当行房。文治二年（一一八六）正月、鶴岡御参詣随兵二十人の烈也。天文年中久代弾正。先祖は備後国久代の領主にて宮氏也。（後略）」[12]（丸括弧内注記原田）とあり、『備中集成志』巻九之巻古城之部・哲多郡之分「西山城　八鳥村」の項には「当城開基市川別当行房。鎌倉右大将家ヨリ被宛行ケル。天文年中城主久代弾正領ス。先祖備後国久代ノ領主本姓宮氏也。（後略）」[13]とある。

『岡山県大百科事典』は「西山城」について「阿哲郡哲西町八鳥の要害山にあった中世の山城。鎌倉時代初頭に源頼朝の家人市川別当行房が築城したといわれる。１５１６年（永正１３）行房の子孫の市川式部少輔経好はこの城から山口の鴻の峰城主に移った。そのあとに備後西城から宮高盛が入城。高盛は城を修築し、毛利氏の武将として野馳を治めた。（略）ふもとは新見往来、成羽往来、東城往来の三差路になっており、備後、備中に通じる要衝である」[14]と記している。市川別当行房は源頼朝の御家人で、『吾妻鏡』第六、文治二年（一一八六）正月三日の条に鶴岳八幡宮御参詣随兵の中に「市河別当行房」の名がみえる。[15]この市川別当行房西山城開基説について、『岡山県の地名』は「『備中集成志』は源頼朝の家人市川別当行房の築城と記すが、確かではない」[16]と述べている。

西山城が市川別当行房の築城かどうかは未詳であるにしても、八鳥の町地区が戦国期から西山城の城下町として栄えた地域であったことは確かであり、この地に金売吉次伝説が伝えられているのは非常に興味深い。特に、西山城が「源頼朝」の御家人市川別当行房により築城されたという伝承と、「源頼朝」の弟であった源義経に影響を与えたとされる金売吉次がこの地で生まれたという伝説との間には密接な影響関係があると推定され、注目される。

金売吉次について、土地ではどのように語られているのであろうか。次に、八鳥地区で採集した語りを提示してみることにしたい。

〈事例１〉「金売吉次と産湯の井戸」

金売吉次はここの生まれ。この八鳥（はっとり）の生まれ。石田吉次。まあ鉄の商いをしてましたからね。砂鉄の商いをしてましたからね。鎌倉時代にね。（子孫はいるか）いません。石田。言い伝えです。この集落の。歴史の本にも載ってるはずよ。詳しいことは、ちょっとよくわかんないですね。

そこらへんが全部、屋敷跡。あそこ今の、セメン瓦があるでしょ、あそこの木のとこに、あの建物の下側に。そこ下りられたらわかりますけどね、産湯の井戸がある。ちゃんと残ってるんです。[17]

〈事例１〉は金売吉次は八鳥の生まれで石田吉次といい、屋敷跡には産湯の井戸が残っているという語りである。この話者によると、吉次は砂鉄の商いをしていたという。石田姓ということなので土地に子孫がいるか質問してみたところ、石田姓というのは言い伝えで、子孫を名乗る家はないということであった。八鳥地区において、〈事例１〉以外の複数の話者にも聞いてみたが、やはり金売吉次の子孫を名乗る家はないとのことだったので、現在の八鳥地区には屋敷跡の伝説はあるが子孫の伝承は存在していないらしいことがわかった。

〈事例２〉「金売吉次と道明寺屋敷」

ただ私が（嫁に）来た時は、井戸があるゆうことを聞いとるだけなんです。井戸があったいうこと。吉次が産まれた時に産湯を使った井戸。お水をあれして沸かして。それだけ聞いとんですよ。なんか小屋を建てるつもりで井戸をつぶして、おったんですけど、市の方から残してくれればいうことで、ちょっと小さめにはしたんですけど、残してありますけどなぁ。大きな木を植えとるんで、その葉っぱがいっぱい落ちて、なかなか掃除ができんのです。立て札もあるんですけど、いっぺんはしてくれたんですけど、もうぼろぼろんなって、うちにもかまわんしで、あそこんとこへ入れとんですけど。下にも立て札してあります、説明した。それを読まれたら、わかると思うんですけど。（井戸は今より）もう少し大きかったです、私来た時は。畑の真ん中にあった。変わっとりません井戸の位置は。

やっぱり道明寺屋敷ゆうたら、屋号ですかなぁ。屋敷ですからなぁ。ようわか

りませんそこのところは。ここは明本寺（みょうほんじ）というんです。ここまっすぐ上がった、赤い屋根のお寺は。（明本寺と道明寺の関係は）わかりません。お寺は、いろいろようけあります。この山の向こう側にもあるし。ここは昔城下町で、そこに山があるでしょ、（野馳）小学校の向こう。あれの上にはお城があったんじゃそうです。私らも、上がったことがあるんですが、瓦なんかがあるんですよ、いっぱい。[18]

〈事例2〉は道明寺屋敷の敷地内にある吉次の産湯の井戸についての語りである。〈事例2〉の話者は道明寺屋敷と称されている土地の現在の所有者で、ここへ嫁に来た時（昭和三十年頃）は、吉次が産まれた時にその水を沸かして産湯を使った井戸があることを聞いただけであったという。井戸の位置は昔と変わっていないが、昔は畑の真ん中にあったということであった。以前、小屋を建てるつもりでその井戸をつぶそうとしたが、市の方から残してくれればといわれて少し小さめにはしたが残したそうである。その頃設置してもらった立て札があるが、老朽化したまま井戸のそばに置いてあるとのことであった。道明寺屋敷という呼称が屋号なのかどうかはよくわからないそうであるが、産湯の井戸のまわりの地を道明寺屋敷と呼んでいるそうである。また、すぐ近くにある寺は明本寺（みょうほんじ）というが、明本寺と道明寺の関係はわからないということであった。なお、道明寺屋敷周辺の土地は、近年所有者が頻繁に変わっているようである。

現在は小屋の裏側にある産湯の井戸に行くと、老朽化した立て札が二枚立て掛けてあった。一枚目の文面は「金売吉次の生家跡／京都の鞍馬山で修業をしていた牛若丸（源義経の幼名）を、奥州平泉（岩手県）の藤原秀衡（衡ヵ）の館へ案内した。／金売吉次が生まれた家である道明寺屋は、ここであったという。／新見市の田曽に、吉次の墓と伝えるものがある。／哲西町自然と文化の保護協議会」、もう一枚の文面は「吉次の産湯の井戸／吉次は保延五年（一一三九）に生まれ、父は吉内、母は松山、この井戸で吉次の産湯の水を汲んだと言い伝える。／十六才の時両親とも世を去り、みなし子となったが、成長して父の業をつぎ、金売商人になったという。／哲西町自然と文化の保護協議会」というものであった。

〈事例2〉の話者からは、金売吉次に関する一枚のA4版チラシをいただいた。これは、看板を設置した頃に印刷したものを多数もらったということであった。そのチラシには「金売吉次の出生地　哲西町八鳥　道明寺屋敷跡」という大見出しがあり、次のような解説文が記してあった（丸括弧内注記原田）。

哲西町八鳥には道明寺（どうみょうじ）屋敷跡を伝える土地がある。金売商人石田吉次末春が生まれたのがこの道明寺屋であると伝えられる。性（姓ヵ）は「石田」で、「道明寺屋」は屋号である。／明治33年、大阪の青木書店（青木嵩山堂ヵ）から出版された松居直幻（真玄ヵ）著「金売吉次」の内容のあらましを記すと、「保延5年の元日、哲多郡八鳥村道明寺屋吉内の妻松山が男児を産む。16歳で孤児となったが、要害城神代弾正は、吉次末春と名のらせ召しかかえる。後事情あって城払いとなったが、父の遺業を継ぎ金売り商人となる吉次はかねてから源氏再興を願い、しばしば京都に上がっていた。そのころ鞍馬山で剣術のけいこをする牛若丸を見て、器量の具わっているのを見ぬき、伴って奥州藤原秀衡の許へ旅立つ」という。／また江戸時代に作られた「備中集成誌（志ヵ）」という書に、「哲多郡八鳥村道明寺屋、金売吉次末春が紀州高野山の東光寺院へ、十一面観音の像を寄進し、その証文があるという。」と記されていたが、火災のため失ったという。／お問い合わせ：哲西町自然と文化の保護協議会

このチラシの文面は、「哲西町自然と文化の保護協議会」の作成となっている（この協議会は旧哲西町教育委員会内にあった組織だったそうで現在は存在していない）。このチラシの記述から、産湯の井戸にある二枚の立て札とこのチラシの根拠資料が明治三十三年に大阪の書店から出版されたという本であったことがわかる。[19] この本（松居真玄（松葉）著『金売吉次』）は小説で、吉次は保延五年元日に生まれ、両親は哲多郡八鳥村道明寺屋吉内と妻松山で、十六歳で孤児となったが要害城神代弾正が吉次末春と名のらせ召しかかえ、事情あって城払いとなった後に父の遺業を継ぎ金売り商人となり、しばしば京都に上がったという内容が書いてあるという。しかし、八鳥の金売吉次伝説に関しては、先に見た『古戦場備中府志』『備中集成志』あたりしか関連資料が見当たらないため、この小

説の記述の根拠は不詳である。八鳥地域で聞き取り調査をしてもこの小説に記されている情報（吉次は保延五年元日生まれ、両親は道明寺屋吉内と妻松山、十六歳で孤児となったが要害城神代弾正が吉次末春と名のらせ召しかかえた）を知っている人はいなかったので、土地の伝承をまとめたものでもないように思われる（この小説の記述内容に関する扱いは注意が必要かと判断される）。

〈事例3〉「道明寺屋敷の隣の家」

この家を建てて十五年ぐらいなるかな、十三年かな。（昔の）この家もちょっと、変わった家で、床（とこ）があるでしょ、奥の間に。その、床がこういうにあると、ここへ壁がありますな、後ろへ。掛け軸なんか掛ける。掛け軸掛けるでしょ、そこの後ろに、こげぇな、抜けて出る穴があったんじゃそうです。私も、来た時は、お母さんから聞いたんですけど、穴があって、人が来たらそこから、いろんな、関係のないいうか、都合の悪ぃお客さんが来られたら、そこから抜けて逃げて、しょうけごや（塩気小屋）ゆう、しょうけごやゆうたら漬け物とか味噌をする倉。それがあって、そこへ逃げる、道があったゆうて。ちょっと変わった家でした。もう、私が来た時は百五十年以上たっとるから、ここへ来て六十年なるから、二百年以上なるでしょうなぁ。壁にちゃんと、塗りつぶした跡がありました。お母さんからそういうに聞いて。[20]

〈事例3〉は道明寺屋敷の隣の家についての語りである。道明寺屋敷の隣の家は、建て替える前は二百年以上前に建てられた古い家で、奥の床の間の、掛け軸を掛ける壁の後ろに抜け穴があり、都合の悪い客が来たらそこから抜けて、漬け物や味噌を保管する塩気小屋に逃げる道がある変わった家だったという。

今から約二百年前というと、平川金兵衛親忠『古戦場備中府志』が成立した享保二十年（一七三五）から約八十年経った十九世紀初頭頃にあたる。『古戦場備中府志』に「売金の商吉次・末春は石田氏にて、当町の宿屋道明寺屋と号す」とあることから、少なくとも十八世紀前半頃の道明寺屋は「宿屋」であったらしい（道明寺屋が宿屋だった期間については不明）。その宿屋道明寺屋の隣の家が、〈事例3〉で語られているような家であったようで、江戸時代における道明寺屋周辺地の特殊性の一端を感じさせられ、興味深いものがある。道明寺屋敷周辺は西山城の城下町として栄えた地であり、そのような地に金売吉次生誕地伝説が伝承されてきたことがわかる。

〈事例4〉「義経と吉次」

義経を道案内したいうことがあるでしょう、金売吉次が。あれをかくもうたゆうて。お兄さんに、追われて。そういうことまでしか聞いとらんから。（ここに連れて来たのか）連れて来とんですよ。隠したのはあっちの。テレビでするから。そういうこと。それと聞いたり。それを聞いたり、まあ、お母さんから、義経をかくもうたゆうことを。両道あるんですけどな、義経をかくもうたゆうのは。外国へ逃がしたいう人と、自分がかくもうてこっちで死んだいうんと、両道あるんですけど、どっちが本当か知らんのですけどな。ああいうことを聞いたりして。[21]

〈事例4〉は金売吉次が源頼朝に追われる源義経をかくまうためにこの地へ連れてきたということを聞いたことがあるという語りである。〈事例4〉の話者が（昭和三十年頃）この地へ嫁に来てから、姑さんからそういう話を聞いたそうである。八鳥地区には、金売吉次が源義経をかくまうためにこの地へ連れてきたという伝説が伝えられてきたようである。〈事例4〉の話者によると、以前は毎日のように観光客が来たそうであるが、最近はあまり来ないそうである。

〈事例5〉「八鳥とたたら」

このへんにもかなくそいっぱい出て来ますよ。畑でも田んぼでも。みんなやってたと思いますよこのへん。たたら製鉄はどのへんにあったかはよくわからないんですが、跡はね。まあいっぱい出て来ます。畑でも掘ってみていっぱい出て来ます。かなくそがね。[22]

〈事例5〉は八鳥地区にもたたら製鉄跡があり、かなくそ（鉱滓、スラグ）が多数出てくるという語りである。この地では吉次は砂鉄の商いをしていたと語られているようなので、かなくそが多数出てくるという語りは興味深い（たたら製鉄については後述）。

『哲西史』に「古い人たちの話をきいてかいた」とされる「八鳥の町」の地図

が載っている。『哲西史』が刊行された昭和三十八年（一九六三）頃の「古い人たち」となると、例えば当時九十歳の人が十歳の時は明治十六年（一八八三）となるので、この「八鳥の町」の地図は江戸時代末期から明治時代初期の面影を伝えているものと推定される。それによると、道明寺屋は町地区の中心に位置し、周辺に鍛冶屋、上鍛冶屋、中鍛冶屋、下鍛冶屋、いもじ屋と、鍛冶関係だけで五軒もあったことがわかる。[23] 八鳥は周辺地で生産された鉄が集まる地区でもあったようで、注目される。西山城下の八鳥地区は、「新見往来、成羽往来、東城往来の三差路になっており、備後、備中に通じる要衝」であったこととあわせ、この地に金売吉次伝説が伝えられてきたことの背景の一端がうかがえる。

Ⅲ　田曽の金売吉次の墓

次に、備中国哲多郡井村（現在の岡山県新見市足立田曽）の金売吉次伝説について検討してみることにしたい。先にみた『古戦場備中府志』に「井村に吉次が塚とて旧跡有。人皆しる所也」とあるように、旧哲多郡井村（新見市足立田曽）には金売吉次のものと伝えられてきた墓がある。ただし、今では「吉次が塚」という古い呼称は誰も使わなくなっている。

田曽周辺では金売吉次についてどのように語られているのであろうか。田曽周辺で直接採集した語りを提示してみることにする。

〈事例6〉「田曽の金売吉次の墓」

高さがちょうど草の高さぐらいの墓でな、石垣を積み上げて、その上に石を置くようにしてあるんじゃ、金石（かねいし）さん言うて。それがもう草でわからんようなって。そりゃぁあの学生行ってみようたけども水がたまっとるから田んぼの中へ。そりゃ水たまっとるそこは昔田じゃったんじゃから言うたんですけどな。

下から、なんぼう目の田んぼ、二つ目か三つ目の田んぼじゃけどな。あれ畑の方に道路が入っとりますけえな道が。それからとろとろっと下りて田んぼの中にこっちから、へりからなんぼう、五、六メーターの所にあるけどな。

金売吉次はその、伝説はまあいろいろ聞けば広範囲に渡っとる人じゃけど。哲西で生まれて井村（いむら）で育つゆう、話は聞いたことがあるんです。生まれは哲西の方らしいですよ。でもまあこの人全国漫遊水戸黄門じゃないけどが、あっちこっち行っとられてまあ、時代劇も出たり義経の道案内をしたとか、どうも時代が年代がばらばらなっとんじゃけどどうも私らもはっきりした伝説はわからんのじゃけど。ここはもう今は足立（あしたち）なっとんですけど、昔は上市村（かみいちそん）大字井村じゃったんですよ。その頃に、哲西で生まれて井村で育つか、阿哲で生まれたかなんかいう文章つづった人があって、新聞かなんかに載ったことがあるがな。それはもう四、五十年前じゃけど。

私らがここの方で聞くのは、今はこれだけの家じゃけど、だいたい田曽いうのは、楪城（ゆずりはじょう）のだいたい落ち武者いうんか、配下じゃったんかなんかそういう関連があるわけですら。じゃからあの、当時（明治時代頃）、住居が四十戸ぐらいあったらしいんすけどな昔。[24]

〈事例6〉は田曽にある金売吉次の墓についての語りである。土地ではその墓を金石（かねいし）さんと呼んでいるそうである。四、五十年前に「金売吉次は哲西で生まれて井村で育つ」ということを新聞に書いた人がいたという。また、田曽は楪城と関連があるそうで、昔（明治時代頃）は住居が四十戸ぐらいあったらしいとのことであった。[25]

〈事例7〉「金石さん」

金石（かねいし）さん、よう行った。あそこは田んぼじゃったから、田植えの手伝いにも行ったり。その石がカネの音がするチーンチーンチーン、上の（石）。カネの音がするからカネ石さんカネ石さんいうて。私らその頃にゃ金売吉次の墓じゃゆうて皆言うんじゃけど、それとは知らなんだんじゃけどが。[26]

〈事例7〉は、田曽の金売吉次の墓とされる石はたたくとチーンとカネの音がするのでカネ石さんと呼ばれているという語りである。墓石の上の石をたたくとカネの音がするという。〈事例6〉の話者もたたくとカネの音がするのでカネ石さんと呼んでいたそうで、子どもの頃は金売吉次の墓と伝えられていることも知らなかったそうである。

『新見市史』「金石さん（足立田曽）」の項には、「足立田曽には、金売吉次の墓だといわれる墓石があり、「金石さん」と呼ばれている。／吉次は、牛若丸に源氏再興の望みを託し、牛若丸を伴って奥州の藤原秀衡を尋ねたといわれる人だが、墓石は極めて素朴で、田の中に、礎石と一メートルほどの角張った自然石、その上に五〇センチメートルほどの平たい円形の石が置かれている。この石を軽く打つと金属音がする。「金石さん」と呼ばれる由縁であろうか。一〇〇年ほど前までは、ここは畑であったが、田に変えるため、墓石を畦（あぜ）に移したところ、たちまち家族の者に病人が出た。拝んでもらったら「金石さん」のたたりだといわれて、元の位置に戻した。そのとき、礎石の下には、一刀が埋められていたという。[27]」と記されている。

ここに記されている、百年ほど前に畑から田に変える時に墓石を移したところ病人が出たため元の位置に戻したという話と、礎石の下には一刀が埋められていたという話は、もうすでに現在の田曽周辺で知っている人はいなかった（この話は墓石がある田を所有していた池田家で伝えられてきた話のようである）[28]。

『哲西史』「金売吉次の墓」の項には、「足立駅から2・5キロほど東にあたり、田曽部落の東の端になる。そこの池田要次郎氏を訪ね、来意を告げると、ところよく案内してくださった。吉次の墓というのは、池田氏所有のひやけ田とよぶ田の中に、たて、横、高さがそれぞれ60センチ、100センチ、70センチぐらいの角ばった自然石がおかれ、その上に長径、短径、厚さが60センチ、40センチ、25センチほどのほぼだ円形の平たい石をのせてある。前に1本の竹筒がたててあってシキミの枝が供えてある。だ円形の石を小石で打てば、金属様の音を発するので、土地の人びとは「金石（かねいし）さん」とよんでいるそうである。金売吉次の墓であるとはむかしからの言い伝えで、吉次が源平合戦の際源氏のさむらいを案内してこの地に来て住みつき、ここでなくなったので葬ったのだとの言い伝えがあるそうである。池田氏は吉次の子孫ではないが、自分の土地に墓があるので、毎朝仏壇に線香をたて、祖霊とともに吉次の霊も拝し、盆と彼岸にはこの墓に花など供えられるそうである。この部落にほかに吉次をまつる社はむかかしら（むかしからヵ※原田注）ないそうである。[29]」と記されている。これは昭和三十七年（一九六二）三月に小坂弘氏が調査して記したもので、当時の状況がよくわかる記述となっている。

この記述によると、金売吉次の墓であるという言い伝えがある石は小石で打つと金属様の音を発するので金石さんと呼ばれ、吉次が源平合戦の際源氏の武士を案内してこの地に来て住みつきここで亡くなったので葬ったという言い伝えがあるそうである。石がある田はひやけ田と呼ばれ、昭和三十七年当時は池田要次郎氏が所有しており、池田氏は吉次の子孫ではないが土地に墓があるので毎朝仏壇に線香をたて、盆と彼岸にはこの墓に花などを供えていたという。この昭和三十七年時の報告に吉次をまつる社は昔からなかったと記されていることから、『備中集成志』にある「金売吉次末春之宮」は、金石さんと呼ばれる金売吉次の墓そのものを指していた可能性がある。あるいは、『備中集成志』の頃にはこの石の前に小祠のようなものが設けられ、「金売吉次末春之宮」と呼ばれていたのかもしれないが、もはや事情を知る人はいないためよくわからない。

『哲西史』「金売吉次の墓」の項では池田要次郎氏が吉次の墓とされる石に花やシキミの枝などを供えている様子が記されていたが、要次郎氏も子息の傳市氏もすでに亡くなられたそうで、池田家は転出して現在空き家になっている。金売吉次の墓とされる石のある田も耕作放棄地になって久しいため、草が茂って石が隠れ、近くに行ってもわからなくなっている。周囲の家はすべて空き家で花を供える人もいない。〈事例6〉の話者によると、数年前に学生たちが金売吉次の墓を見に来たので行き方を説明したことがあるそうだが、草が茂っていて見つけられなかったと戻ってきたそうである。筆者も最初は見つけることができなかったが、再度挑戦してようやく見つけることができた。『哲西史』の記述通り、角張った自然石の上にだ円形の平たい石が置かれていた。だ円形の平たい石を小石で軽く打つと金属音がするということなので、拝んだ後に試みてみると、金属分を含む石のようで、確かにキンキンと金属性の音がした。土地の人びとからカネ石さんと呼ばれた理由がよくわかった。

〈事例8〉「田曽の金売吉次の墓」

吉次の墓が、田曽（たそ）と、油野（ゆの）かどっかへ、二ヵ所あるゆうのを僕ら言い伝えで聞いとる。どっちが本物かはわからんのですけど、田曽と、油野ゆうて言われていた。油野ゆうのは神郷町の油野。これの、川の向こう側。昔、旧神郷町の油野と、どっちが本物かわからんけど、二ヵ所が、どっちかが本物だろうとゆうことで、僕ら聞いとります。あの、親父らから。油野へは行ったことないです。こっちは、しゅっちゅう僕ら小さい頃よう遊びょうたから。（吉次がどういう人だったかは知っているか）そんなことは僕らはわかりません。僕らぁまだ、六十今四歳ですから。僕らの親の世代でしょう、そがんなこと知っとるゆうたら。もう親の世代はほとんどいませんから。

もう墓があるゆうこと、「これが吉次の墓じゃよう」ゆうて、聞いただけ。それと、親父が言うのが、神郷町の油野と、こっちもあって、どっちが本物か知らんけど、何かようりましたよ。

祠いうのは知らんなあ。昔、これが墓じゃ言うて、吉次の墓じゃ言うて、祀りょうたんですけぇね、昔は。僕らぁ子どもの頃は。お供えやこうしょうりました。今は祀る人がおりません。（集落で祀っていたのか）そうそうそうそう、部落全体でね。部落の人がおらんのですは今は。何ヵ所かな、そがぁな、祀る、祠みたんがあったから、それを、吉次の墓と、何か三、四ヵ所あったかなぁ。僕らもよう子どもの頃ち（付）いて歩きょうたは。へえでその、祀るとこを、ずっと部落全体でしめ縄やこうしたりしてな、小さい。へぇで、祀って歩きょうた。その上へも、昔あったんじゃけどな。じゃけど今は祀る人がおらんし祠みたようもんも、もう全然、崩れてしもうた。[30]

〈事例8〉は金売吉次の墓の伝説は田曽のほかに旧神郷町の油野にもあると聞いたという語りである。昭和二十七年生まれの〈事例8〉の話者が子どもの頃に父親らからそう聞いたという。〈事例8〉の話者に『備中集成志』にみえる「金売吉次末春之宮」について聞いてみたが、知らないとのことであった。自分が子どもの頃は吉次の墓にお供えなどをし、上市の石田の太夫さんが来て集落に三、四ヵ所ある祠を祈ってまわっていたというが、今は祀る人がおらず集落の各祠も崩れてしまったそうである。

昭和十一年生まれの田曽の男性に、金売吉次の墓の伝説は田曽のほかに油野にもあるらしいという人がいるが聞いたことがあるか質問してみたところ、吉次の墓が油野にもあるらしいという伝えは聞いたことがないと答えられたが、次のように話してくれた。

〈事例9〉「油野の製鉄所」

（吉次の墓が）油野（ゆの）にあれば、大成（おおなる）いうとこ今ダムの底になったとこを、ダムつける前に発掘しょうたですけぇな。上油野（かみゆの）と三室（みむろ）とのあいだに、三室川ダムいうんですかな、あの、シャクナゲの祭りをするとこ。あそこの底になっとる。そこに製鉄所があったらしいんですわ。[31]

〈事例9〉は吉次の墓がもし油野にあるのであれば、今は三室川ダムの底になっている大成にあったのではないかという語りである。大成には製鉄所があったそうで、ダム工事の前にそこの発掘をしていたそうである。ここで語られている発掘とは、平成七年度から平成九年度にわたって三室川ダム建設に伴って発掘調査された「大成山たたら遺跡群」の発掘を指しているようである。[32] 大成山たたら遺跡群の発掘調査報告書に「3区では、位置を示してはいないが小トレンチを設定して掘り下げたところ、鍛冶滓が出土した。また、移転されていたため詳細は不明であるが、古老によると村下の墓が所在していたそうである」[33]という記述があるので、ダムの底になっている大成に古い墓があったのは確かなようであるが、それが吉次の墓の伝承を持つものであったかは不明である。

その後の調査でも、金売吉次の墓が油野にもあるらしいという言い伝えを聞いたことがある人は〈事例8〉の話者以外には出会えず、文献類でも確認できなかった。油野にも金売吉次の墓があるらしいという伝承は広く知られたものではなかったらしいことがわかったが、昭和二十七年生まれの〈事例8〉の話者が子どもの頃に父親らからそう聞いたということから、少なくともそういう伝承がかつて田曽に存在していたらしいことがうかがえる。油野がたたらで栄えた頃に、そ

のような伝承が生じたのかもしれない。もうすでに古い伝承を知る人がほとんどいなくなっているため、異伝として油野説が存在していたことを報告しておくこととしたい。

〈事例10〉「田曽のかなくそ」

製鉄の跡があるのは、持ち主はKさんが。この、ちょうど田曽へ上がりがけに、黒瓦の家がありますら。Kさんが持ち主。植林の中へあります、檜の。Kさんは知っとる。家からだいぶ上がったとこですけどなあ、Kさんの、田のねきですわ。あそこのかなくそは吉川のたぁちょっと違うな、大きい。これぐらいの塊のがありますけぇな。ようけ積んどりますあそこは。[34]

〈事例10〉は田曽にかなくそが多数積んである場所があるという語りである。かなくそを積み上げてある場所は田曽のあちこちにあるそうだが、Kさんの土地にあるものがかなり多いということであった。その後、Kさんを訪ね、かなくそが多数ある場所を案内してもらったところ、確かに大量のかなくそが積み上げられていた。昔、Kさんの父親が大量のかなくそがあるその地に植林したそうで、今は檜の林になっている。かなくそのある場所が現在でも多数あることからもわかるように、田曽周辺はたたら製鉄が盛んな地域であった。

田曽の金石さんについて、鉄その他の物資の運搬を業とする問屋の商人かまたは鉄山師の墓ではないかという説があるが、関連資料がないためよくわからない。[35]

Ⅳ　中国地方のたたら製鉄と街道

中国地方がたたら製鉄の盛んな地域であったことはよく知られているが、田曽で聞いたたたら製鉄に関する話を提示したい。

〈事例11〉「砂鉄・木炭とたたら製鉄」

明治の前頃は、馬をうちに飼うて、四頭か五頭。島根県かな、今の横田のへんから、このへん砂鉄を運びょうたらしいですら。で、製鉄した跡がこのへんに点々、あるんですがな。まあここの方は製鉄した跡が吉川にもあるし、へえから、三室川ダム。高瀬ダムじゃなしに三室のダムに、大成いうとこかなあ、そこにも製鉄所があって、あっこを掘ったはず、採掘したらしいんですがな、製鉄所の跡を。へでまあだいたいここの方もその、その製鉄のかねの元締めは、鳥取県、阿毘縁の近藤が親子じゃったとかいうような話は聞いとんじゃけどな。まだその屋敷ありますが阿毘縁に。でまあそれの配下で皆いろいろここの方にゃあ、塚穴もあるし、製鉄した所もあるし。たたらいうんですかな、昔の、鉄くずの鋳物のような固まったのがあるとこが、何ヵ所かあります。田曽、ええ、この下にありますよ。（製鉄の）跡が。そうじゃなぁ、三十坪か四十坪ぐらい山積みしとるな、あの場所に。製鉄のたたらいうんですか、石と石炭、炭とかが溶けて固まったようなんがあるでしょう。かなくそいう分です。あれがありますら、この下に。Aさんとこの奥に今あります。あそこは多い。あそこはもう山積みになっとるから。あそこは相当な製鉄したもんらしいです。ゆうのがあのう、結果的には昔は石炭がない頃じゃからこのへんに木炭ができるからその、砂鉄を運んで、製鉄をこっちでしょったらしいんですけどな、話に聞けば。[36]

〈事例11〉はたたら製鉄が盛んであった頃の様子を語っている。〈事例11〉の話者の先祖は、明治の前頃（江戸時代末期頃）、馬を四頭か五頭飼って今の島根県横田のあたりから砂鉄を運んでいたという。そして、運んできた砂鉄をこちら（新見周辺）の木炭を使って製鉄したらしいということであった。また、製鉄の元締めは鳥取県阿毘縁の近藤親子だったとか聞いているとのことであるが、おそらく根雨の近藤の語り違いかと思われる。

阿毘縁にも根雨にも有名な鉄山師がいた。阿毘縁（現在の鳥取県日野郡日南町阿毘縁）の有名な鉄山経営者は木下姓を称していた。初代木下彦兵衛は慶長年間（一五九六～一六一五）に入植して上阿毘縁村を開拓し、鉄山で産をなしたとされる。[37] 根雨（現在の鳥取県日野郡日野町根雨）の有名な鉄山経営者は近藤姓を称していた。始祖近藤伝兵衛が江戸時代中期に備後国から根雨に移住してきたとされる近藤家は備後屋を屋号とし、近藤家の二代喜兵衛が安永八年（一七七九）に初めて製鉄を開始してから大正七年（一九一八）にいたるまで代々製鉄業を営んだ。第四代平右衛門（一八一一～一八七三）の時最盛期に達し、製鉱所計六ヵ所、

錬鉄所計八ヵ所を経営し、年産は銑鉄最多二八二、八〇〇貫、錬鉄最多一三四、〇〇〇貫に及んだという。[38]

『岡山県の地名』に「下神代・油野ともにタタラ跡・鉄穴流し跡が多数あり、江戸時代の産額は相当のものであったと思われる。開始時期・稼行期間など不明な点が多いが、下神代の坂根に金沢山（藩営、天保八年開設）、油野の三室に三室山（藩営、文政七年開設）・大杉山・亀ヶ原、上油野に京坊山・大成山、吉田に大重山の鉄山（タタラと大鍛冶屋を兼営）があり、これらの鉄は油野の馬子によって川之瀬に運ばれていた。[39]」とあるように、下神代・油野地区（現新見市）だけでも江戸時代の鉄山経営はかなり盛んであった。

阿賀郡と哲多郡の砂鉄産額について、『阿哲畜産史』は、嘉永七年（一八五四）に阿賀郡井原村庄屋が新見藩へ建議した文書に新見領内の砂鉄採取高が三万五六千駄とあることから、天領五村（実村・成地村・花見村・大井野村・山奥村）で同額、さらに松山領（上神代村・油野村）分とあわせて年産合計八万駄と計算し、「この運送は延八万匹の駄馬を要することになる」（傍点原文）と述べている。[40]

〈事例11〉の話者の先祖は馬を四頭か五頭飼って砂鉄を運んでいたということであるが、運送用駄馬について『新見市史』は、「鉄山業の機能を実際に活動させる原動力になるものの一つとして運送用の駄馬が必要であった。当時、交通運輸機関の第一要具である駄馬がいなかったなら、阿賀・哲多地方に鉄山業は発達しなかったであろう。この地方の駄馬は、鉄山業の盛んな時代にはその頭数も多く、この駄馬による稼ぎで、備北一帯の経済は大いに潤ったのである。馬子による稼ぎは、農家の副業であったが、鉄山業が盛んになるにつれて、本業の一つになっていった。[41]」と述べている。阿賀・哲多両郡で年に延べ八万匹の運送用駄馬が必要であったことから、多数の駄馬が各村で飼育された。各村の農家では、駄馬稼ぎをしないと各人経済に困るので、荷物さえあれば駄馬稼ぎをし、飼える者は何頭でも飼育したという。[42]

たたら製鉄は大量の木炭を必要とした。[43]製鉄業と木炭について『新見市史』は「鉄山業は砂鉄がなければ成立しないが、同時に砂鉄を溶解する木炭を得なければ、その経営は成り立たない。炭焼きすなわち木炭の調達は鉄山業と不可分のものである。かつて県南の吉備地方で行われていた製鉄業が北部で行われるようになったのも、中国山地の砂鉄の存在とともに、大山林から木炭を生産することができたからである。東は美作、北は伯耆、西は備後の国境をなす分水嶺は、全部御林山である。阿新地方のこの広大な森林資源から無尽蔵ともいえる木炭の製造ができたから、鉄山業が行われたといってよい[44]」と述べている。

〈事例12〉「出雲への街道」

まあ昔はこのう、川沿いには道路がなかったんですが山から山へ渡りょったんですけぁな。出雲街道いうのがこの下を通っとるんです。上市内ノ草からこれ（田曽）を通って油野へ通って行くんと、へえから、もう一つは木戸から芋原へ行って吉川を通って。出雲街道二本あるんですら。あかせんが。昔は、馬とかああなんで物を運びょったらしい。その頃明治の前の時代に、私のうちには馬が四頭おったいうことは聞いとんですがな。

（出雲への街道は田曽を通ったのか）足立に抜けて通っとるんです。内ノ草ゆうとこから。ずうっと下りたとこにね、田んぼがあります。荒れ田が。そこを通っとるんです。へえから、芋原いうのは、知っとられます？　吉川と芋原。この田曽からずうっとこの裏に吉川があるとこに行くとこに芋原いうとこがあるんですよ。そこは宿場だったらしいです昔。それも出雲街道です。その芋原のちょっと向こうに上吉川ゆうのがあるんですが、Aさんいうんがおるそこの家のかみに、ちょっと奥の方に、かなくそがようけありますそりゃぁ。それが芋原から吉川、上吉川を通って、三坂川越して三坂から新郷の方へ向けて抜きょうたらしい。それも出雲街道。へでこっちの街道は、油野へ向けて三室へ入って行きょうた。どっちもどっちも出雲街道です。[45]

〈事例12〉は出雲へ行く街道についての語りである。田曽地区周辺の、出雲へ行く街道としては、上市―内ノ草―田曽―足立―油野―三室へ通って行く道と、木戸―芋原―吉川―上吉川―三坂川―三坂―新郷を通って行く道と、二本あるという。『岡山県の地名』に「横見―八谷（矢谷）―居敷野―カタカネ―三坂―日

ヨリ―佐津見（さつみ）―奥谷（おくだに）（三坂以下は釜村）と続く伯耆への道、谷内―宇津草―田曽―足立―吉田（よしだ）（油野村）―亀尾（かめのお）（高瀬村、現神郷町）と続く出雲への道などがあったことが明らかにされている」[46]とあるが、〈事例12〉の話者が語る道は『岡山県の地名』に記されている道と微妙に異なっていることがわかり、興味深い。田曽周辺は伯耆国や出雲国への道が複数通る街道筋であったことがわかる。そして、かつてはこれらの道を通って駄馬が砂鉄や木炭等を運んでいたわけである。

中国山地では砂鉄の採取により古代から製鉄が行われた。奈良時代の製鉄は中・南部が主で、その後中国山地の開発が進んだとされている。鎌倉時代の建仁二年（一二〇二）伊勢神宮内宮領「神代野部御厨」（現在の新見市域内に比定）が成立し、鉄三千挺を貢納している。[47]近世以降はたたら製鉄が全盛期を迎え、「明治二十年代には中国地方四県で国内生産高の七九・一％を生産していた」というが、鉄鉱石を原料とする近代製鉄法の導入によりたたら製鉄は衰退していった。[48]

結　語

以上で岡山県新見市の金売吉次伝説に関する筆者なりの考察を終えることとしたい。

備中国（現在の岡山県）の金売吉次伝説に関するもので最も古いものは享保二十年（一七三五）成立の平川金兵衛親忠『古戦場備中府志』にある記述である。備中国には哲多郡八鳥（新見市哲西町八鳥）と哲多郡井村田曽（新見市足立）に金売吉次関連伝説が伝承されている。

新見市哲西町八鳥には金売吉次生誕地伝説が伝承されている。八鳥の町地区には金売の石田吉次末春が住んでいたという道明寺屋敷と称される地があり、道明寺屋敷には吉次が生まれる時の水をくんだという産湯の井戸がある。八鳥で調査すると、吉次は砂鉄の商いをしていたらしいという伝説や金売吉次が源義経をかくまうためにこの地へ連れてきたらしいという伝説を採集することができた。八鳥地区は戦国期から西山城の城下町として栄えた地域で、西山城は源頼朝の御家人市川別当行房により築城されたという伝承がある。この、西山城が「源頼朝」の御家人市川別当行房により築城されたという伝承と、「源頼朝」の弟であった源義経に影響を与えたとされる金売吉次がこの地で生まれたという伝説との間には密接な影響関係があると推定される。これまで、西山城築城者伝承と金売吉次伝説を結びつけるポイントが「源頼朝・義経と何らかの関係をもつ者」であることに言及されることがなかったが、備中国における金売吉次伝説の成立背景の一つとして見落としてはならない視点だと思われる。備中国における金売吉次伝説を紹介する最も古い文献である平川金兵衛親忠『古戦場備中府志』が、西山城の項で金売吉次伝説を紹介していることから、少なくとも平川金兵衛親忠は西山城築城者伝承と金売吉次伝説を結びつけるポイントが「源頼朝・義経と何らかの関係をもつ者」であることを認識していたのではないかと推定される。八鳥地区は「新見往来、成羽往来、東城往来の三差路になっており、備後、備中に通じる要衝」で、周辺地で生産された鉄が集まる地区であったこととあわせ、この地に金売吉次伝説が伝えられてきたことの背景には複数の要因があるらしいことがうかがえる。

新見市足立には金売吉次終焉地伝説が伝承されている。足立の田曽地区には金売吉次の墓と伝えられる金石（かねいし）さんと呼称される石があるが、『古戦場備中府志』に「吉次が塚」と記されているものと同一のものと推定される。田んぼの中に、約一メートルの角ばった自然石があり、その上に約五十センチのだ円形の平たい石が置かれている。そのだ円形の石をたたくとキンキンと金属性の音がするため金石さんと呼ばれてきたようである。田曽では吉次が源平合戦の際源氏の武士を案内してこの地に来て住みつきここで亡くなったので葬ったという言い伝えがあるという。田曽周辺はたたら製鉄の盛んであった地で、現在でも大量のかなくそが残っている。田曽周辺は伯耆国や出雲国への道が複数通る街道筋で、これらの道を通って多数の駄馬が砂鉄等を運んでいた。田曽の金石さんについて、鉄その他の物資の運搬を業とする問屋の商人かまたは鉄山師の墓ではないかという説があるが、関連資料がないためよくわからない。ただ、『古戦場備中府志』に記されている高野山東光院に観音像を寄進したという道明寺屋石田氏吉次末春の

ように、実際に金売吉次を名乗る荷物運送問屋商人か鉄山師かが存在していた可能性はあるように思われる。

たたら製鉄は砂鉄を溶解する大量の木炭を必要としたため、中国山地の広大な森林資源から大量の木炭が生産されてたたら製鉄に使用された。備中国の金売吉次伝説を読み解く鍵は、やはり「たたら製鉄」と「炭焼」にあると考えられる。

柳田国男氏は「炭焼小五郎が事」において、羽前村山郡宝沢と岩代信夫郡平沢に炭焼藤太の居住遺跡がありその子が吉次・吉内・吉六の三兄弟の金売であったこと、信州園原の伏屋長者の先祖が金売吉次でその父が炭焼藤太であったこと、加賀の芋掘藤五郎黄金伝説のイモは鋳物師（いもじ）のイモと考えられること、金屋が神とその旧伝を奉じて各地を漂泊していた種族であること、金売吉次の黄金専門も「一つの空想であった」こと等を述べ、「吉次の遺迹という地」が両立しないほど各地にあるのは「すなはち彼自身が運搬自在なる仮想の人物であった一つの証拠で、さらに推測を進めてみれば、中古実在の鋳物師に、吉を名乗りに用いた人の多かったことと、何ぞの関係があるようにも思われる」と記している。[49]

新見市に金売吉次伝説が伝えられてきた背景には、中国地方各地で盛んであった「たたら製鉄」の存在が強く関係していると推定される。柳田国男氏が説く、炭焼小五郎伝説や金売吉次伝説を語りつつ各地を漂泊した炭焼や鋳物師などの職能集団の存在も伝説の成立に何らかの影響を与えているように思われる。[50] また、吉次を名乗る複数の人物が存在していた可能性についても考えておく必要があろう（本稿で検討した、道明寺屋石田氏吉次末春もその一人であった可能性がある）。

新見市の金売吉次伝説には、金売吉次伝説が成立するのに必要な「たたら製鉄」「炭焼」「鋳物師」などの要素がすべてそろっているうえ、金売吉次の生誕地伝説から終焉地伝説まで伝承されている。金売吉次伝説の研究を進展させてゆくうえで、新見市の伝承事例は大変貴重なものといってよいであろう。

〈注〉

〔本稿における諸資料よりの引用文中、旧漢字・異体字は原則として通行の字体に改めた。〕

（1）引用は日本古典文学全集『義経記』（小学館・一九七一）によった。なお、吉次に関しては、学習院大学図書館蔵本『平治物語』下巻に「毎年陸奥へ下る金商人」（新日本古典文学大系『保元物語　平治物語　承久記』岩波書店）、百二十句本『平家物語』巻十一に「五条の橋の辺なる末春といふ商人」（新潮日本古典集成『平家物語下』新潮社）、延慶本『平家物語』第六本に「三条ノ橋次ト云シ金商人」（『延慶本平家物語本文篇下』勉誠出版）、『源平盛衰記』巻四十六に「遮那王殿こそ男になりて、金商人に具して」（『源平盛衰記下巻』有朋堂書店）、などと記されている。野口隆氏「金売吉次伝（上）」（「大阪学院大学通信」三四（五）、二〇〇三・8）・「金売吉次伝（下）」（「大阪学院大学通信」三四（七）、二〇〇三・10）、藪本勝治氏「『義経記』の金売り吉次と陵兵衛」（「国語国文」七九（一一）、二〇一〇・11）、参照。

（2）日本歴史地名大系『岩手県の地名』（平凡社）、「長者原廃寺」の項。

（3）日本歴史地名大系『宮城県の地名』（平凡社）、「大曲村」の項。

（4）日本歴史地名大系『宮城県の地名』（平凡社）、「須江村」の項。

（5）日本歴史地名大系『山形県の地名』（平凡社）、「上宝沢村」の項。

（6）日本歴史地名大系『福島県の地名』（平凡社）、「高瀬村」の項。

（7）日本歴史地名大系『熊本県の地名』（平凡社）、「吉次峠」の項。

（8）『吉備群書集成（五）』（歴史図書社・一九七〇）所収「古戦場備中府志」、一八〇頁。名前「吉次・末春」については、注1に示したように百二十句本『平家物語』巻十一に「五条の橋の辺なる末春といふ商人」、延慶本『平家物語』第六本に「三条ノ橋次ト云シ金商人」とある。

（9）『備中集成志』（吉田書店・一九四三）、一三八頁。

（10）加藤英郎氏所蔵文書『備中国哲多郡八鳥村誌（明治十六年調　調査済）』（『哲西史〈史料編（一）〉』哲西町・二〇〇五、所収）。

(11)『阿哲郡誌上巻』（社団法人阿哲郡教育会・初版一九二九・復刻版一九七六）、二二五頁。
(12) 注8の『吉備群書集成（五）』所収「古戦場備中府志」、一七九頁。
(13) 注9の『備中集成志』、三五九頁。
(14)『岡山県大百科事典　下巻』（山陽新聞社・一九八〇）、「西山城」の項。
(15) 新訂増補国史大系『吾妻鏡第一』（吉川弘文館・一九八四）、一九三頁。
(16) 日本歴史地名大系『岡山県の地名』（平凡社）、「西山城跡」の項。
(17) 話者は岡山県新見市哲西町八鳥の男性（昭和二十一年生）。平成二十八年（二〇一六）六月五日・原田調査、採集稿。
(18) 話者は岡山県新見市哲西町八鳥の女性（昭和十年生）。平成二十八年（二〇一六）六月五日・原田調査、採集稿。
(19) 松居松葉（真玄）著『金売吉次』（青木嵩山堂、一九〇〇）。小説。『哲西史』（哲西町・一九六三）に内容の梗概が記されている（七一～七四頁）。
(20)（21）話者は注18の八鳥の女性（昭和十年生）。平成二十八年（二〇一六）六月五日・原田調査、採集稿。
(22) 話者は注17の八鳥の男性（昭和二十一年生）。平成二十八年（二〇一六）六月五日・原田調査、採集稿。
(23)『哲西史』（哲西町・一九六三）、六四頁。
(24) 話者は岡山県新見市足立田曽の男性（昭和十一年生）。平成二十八年（二〇一六）六月四日・原田調査、採集稿。
(25) 平成二十八年に田曽地区で調査した時には地区の住居は一軒のみで他はすべて空き家になっていた。
(26) 話者は注24の田曽の男性（昭和十一年生）。平成二十八年（二〇一六）六月四日・原田調査、採集稿。
(27)『新見市史通史編下編』（新見市・一九九一）、五三五頁。
(28) 横田昌宜氏「金売吉次と「たたら吹き」製鉄」（「高梁川　第三二号」一九七五・8）。
(29) 注23の『哲西史』、七〇～七一頁。
(30) 話者は岡山県新見市足立田曽の男性(昭和二十七年生)。平成二十八年（二〇一六）六月四日・原田調査、採集稿。
(31) 話者は注24の田曽の男性（昭和十一年生）。平成二十八年（二〇一六）六月四日・原田調査、採集稿。
(32) 岡山県古代吉備文化財センター編「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１４４　大成山たたら遺跡群　三室川ダム建設に伴う発掘調査」（岡山県教育委員会・一九九九）。
(33) 注32の「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１４４　大成山たたら遺跡群　三室川ダム建設に伴う発掘調査」、9頁。
(34) 話者は注24の田曽の男性（昭和十一年生）。平成二十八年（二〇一六）六月四日・原田調査、採集稿。
(35) 注28の横田昌宜氏「金売吉次と「たたら吹き」製鉄」は田曽の金石さんについて、「「カネ石」さんの田の字名は「古ヤシキ」であり、その東側の畑の字名は「焼ヤシキ」というから、米子街道ぞいに鉄その他の物資の運搬を業とする問屋か、または鉄山師（註三、「かんな」「たたら」「かじや」などを経営した資本家。※引用元の註）の「ヤシキ」があったのではなかろうか。…／とすると、問題の「カネ石」さんは、おそらくそういう問屋の商人かまたは鉄山師の墓であろうと推察される」と述べている。
(36) 話者は注24の田曽の男性（昭和十一年生）。平成二十八年（二〇一六）六月四日・原田調査、採集稿。
(37)『岡山県の地名』「上阿毘縁村」の項。
(38) 木村時夫氏「根雨近藤家の歴史ーあるたたら製鉄業者の軌跡ー」（「早稲田人文自然科学研究　第二五号」一九八四・3）・「根雨近藤家の歴史（承前）ーあるたたら製鉄業者の軌跡ー」（「早稲田人文自然科学研究　第二九号」一九八六・3）。『岡山県の地名』「根雨宿」の項。
(39) 注16の『岡山県の地名』、「下神代村」の項。

(40) 松尾惣太郎編著『阿哲畜産史』（阿哲畜産農業協同組合連合会・一九五五）、七二～七三頁。
(41) 『新見市史　通史編上巻』（新見市・一九九三）、八六六頁。
(42) 注40の『阿哲畜産史』、九九～一〇〇頁。『神郷町史』（神郷町・初版一刷一九七一・初版二刷二〇〇五）「馬子（まご）」の項に「鉄山に働く職工は在地の百姓ではなかった。それは長い経験をもった専門家でなくてはならないからだ。（略）山子の中には、鉄山専門のものもいたし、在地の百姓で、農作業の合間々々に炭焼きをするものもいたが、農家の二～三男で、十七～十八才にもなると、大てい馬を索いて荷物輸送に当る馬子になって働いた。（略）油野でも三室でも、馬はどの家にも飼い、多い家では六～七頭も飼っていたということである。釜村でも高瀬でも、おそらくその程度は飼っていただろうと想像される」（三九四頁）とある。
(43) 注38の木村時夫氏「根雨近藤家の歴史」は、たたら製鉄で使う木炭の量について、「たたら製鉄には多量の木炭を必要とするが、一工程（一代（ひとよ））は三昼夜ないし四昼夜を要し、それに要する木炭は三、〇〇〇貫であったという。したがって一製鉱所における木炭の年間消費量は約三〇万貫で、これが六ヵ所であれば一八〇万貫、さらに鍛冶工程で一〇〇万貫以上を要したというから、その量はきわめて尨大である。それはまたそれに必要な山林を確保せねばならぬことを意味した。」と述べている。
(44) 注41の『新見市史　通史編上巻』、八九四頁。
(45) 話者は注24の田曽の男性（昭和十一年生）。平成二十八年（二〇一六）六月四日・原田調査、採集稿。
(46) 『岡山県の地名』「井村」の項。
(47) 『岡山県の地名』「総論」「神代郷」の項。
(48) 注41の『新見市史　通史編上巻』、八八〇頁。
(49) 柳田国男氏「炭焼小五郎が事」（ちくま文庫版『柳田国男全集1』筑摩書房・一九八九、所収）。
(50) 大山喬平氏「供御人・神人・寄人」（『日本の社会史第6巻』岩波書店・一九八八、所収）、笹本正治氏『異郷を結ぶ商人と職人』（中央公論新社・二〇〇二）、谷川健一氏「鍛冶屋の母」（『谷川健一全集9』冨山房インターナショナル・二〇〇七、所収）、網野善彦氏『中世の生業と流通』（『網野善彦著作集第九巻』岩波書店・二〇〇八、所収）。

連絡先：原田信之
新見公立大学看護学部　〒七一八―八五八五　新見市西方一二六三―二

（二〇一六年十一月三十日受理）